

ジョージア (グルジア) 便り その49 歌と生きるジョージア人

文 高野陽年 text by Yonen Takano

ついこの間ミラノにツアーで訪れた際、スカラ座のポスターにジョージア人の名前を見た。ジョージアはたった人口400万の小さな国であるがゆえにジョージア以外の地で彼ら独特の苗字を目にすると急に親近感がわく。そういえば一年前に訪れたニューヨークのメトロポリタン歌劇場でもジョージアの名前をポスターのキャスト表に見た覚えがある。

ジョージア人が胸を張って世界に誇るものがいくつもある。例えば800年の歴史を持つワインや伝説的な振付家やバレエダンサーを輩出した事だ。そして女性男性を問わず力強い歌声をもつ歌手もジョージアのシンボルである。世界の劇場を席巻してきたオペラ歌手達はジョージアのソウルを内外に知らしめてきた。ニューヨークのメトロポリタンやミラノスカラ座、ポリシイ劇場などオペラの殿堂と言われる劇場にはジョージア人の歌手が在籍し、特に男性のバスシンガーは世界をリードしてきたのだ。ジョージア人ではないがシャリアピン・ステークで有名な偉大な歌手フォードル・シャリヤピン

も実はトビリシの音楽院で声楽を学んでいたのだ。昔から声楽においてジョージアはタレント、教育共にトップ水準を誇ってきた。

それもそのはず、ジョージア人は本当に歌好きだ。日本人がストレス発散にカラオケをするのとは違ってジョージアでは複数人でハーモニーを奏で楽しむのが主流である。この夏の暑い時期になると、川沿いのジョージアレストランでは毎日恰幅の良いジョージアの男たちによる宴会が開かれている。この伝統的なスプラと言われるジョージアの宴会では歌が欠かせない。少しばかりアルコールで喉を潤すとアカペラの合唱が始まるのだ。歌が始まれば皆、手を止め歌手たちに敬意を払う。異なる三つの音階からなる歌は言葉がわからなくても神妙さが漂い無垢な気持ちにさせてくれる。

この多声音楽技法はポリフォニーと言われ、ジョージアの伝統的音楽として世界無形文化遺産にも登録されていて、大切な宗教曲として教会で守られてきた。スプラでも神様に感謝を示す形で歌われるのだ。ジョージアで長ら

く信奉されてきたグルジア正教会では無伴奏聖歌が原則で、バッハのようなオルガンミサ曲もなければフォーレのようなレクイエムもない。より祈祷文を忠実に再現する。しかしそれでも神様との結びつきに音楽を重要視したため、自らの肉声のみでハーモニーを奏で奉納してきたのである。ジョージアの声楽はこの国がキリスト教を国教として以来1500年以上守られてきた伝統が息づいていて、人々が神様と交信する手段として生きてきたのだ。それがジョージアがトップシンガーを輩出し続ける理由である。

喧騒を頭から排除し耳をすませば、街中から歌声が聞こえてくる気がする。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

